

氏名(本籍)	つぼもとあつろう 坪本篤朗(東京都)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第1746号
学位授与年月日	平成13年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	モノとコトから見た文法 —文法と意味の接点—
主査	筑波大学教授 P h . D . 中 右 實
副査	筑波大学教授 文学博士 古 川 直 世
副査	筑波大学教授 砂 川 有 里 子
副査	筑波大学助教授 文学博士 廣 瀬 幸 生
副査	筑波大学助教授 P h . D . 竹 沢 幸 一

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語に特有な補文節構文を一般言語学的視野のもとに位置づけ、そこに内在する意味と形式のずれの現象を認知言語学的視点から統一的に説明することを目的とする。

本論文の構成は全部で6章から成る。目次は次のとおりである。

- 序 章 状況と知覚の構文—意味と形のインターフェイス—
- 第1章 文の中に文を埋め込むとき「こと」と「の」はどう違うか
- 第2章 認識動詞構文の形式と意味—文法と認知の接点—
- 第3章 ト書き連鎖と状況構文のネットワーク
- 第4章 文連結の認知図式—いわゆる主要部内在型関係節について—
- 第5章 結語

序章では、著者の立脚する方法論的仮説および概念的道具だてをめぐる考察が展開される。概して統語論中心の考え方では、カテゴリーの境界を離散的・非連続的に捉えるのに対し、著者は形式と意味の関係を連続的に捉える道を探究する。表面的なずれの背後にある意味原理を究明することによって意味と形の適正関係を捉えることを眼目とする。とりわけ、モノ(個体)とコト(事態)の関係を捉える上で有用な道具だてとして、Lakoff(1987)の〈形の空間化の仮説〉が導入される。この仮説によって、文連結のさまざまなありようが空間的な(部分・全体、上下、接続などの)観点から捉え直され、空間的距離と意味の緊密さとの相関関係が突き詰められる。そして第二に、〈類像性〉という概念も重要な役割を果たす道具だてとして導入される。〈類像性〉とは、二つの節の表わす事象間の意味関係が緊密であればあるほど、それら二つの節はより融合一体化したひとつの事象として解釈される構文形式をとる、というものである。かくして〈形の空間化の仮説〉と〈類像性〉の組み合わせによって形と意味の相関性が的確に捉えられるとする。ほかにはLakoff(1987)の構文の考え方、および構文文法的アプローチもまた、多様な構文型の相互関連性を包括的に捉えるための不可欠な道具だてとなる。

第1章は、日本語の「の」補文と「こと」補文をめぐる認知意味論的視点からの比較構文論である。次の三つの文は日本語に見いだされる三つのタイプを例示している。

- (1) a. 太郎は「花子がプールで泳いでいる」の／*ことを見た。
 b. 君は「この辺で大きな事件があった」の／ことを知っているか。
 c. 「足が手と同様の働きをする」こと／*のが要求される。

いわゆる形式名詞「の」と「こと」の区別については諸説があるが、本論文では〈個体志向性〉を尺度にした一般原理すなわち〈類像性の原理〉によってそれが説明可能であることが主張される。個体志向性とは、〈事態〉(コト)全体を背景としてその事態を構成する〈参与者〉(モノ)を焦点化しようとする認識主体の知覚的性向のことである。コトとモノの関係は知覚における地と図の反転現象に見立てられる。このことは、「の」補文の典型例である知覚(とくに視覚)動詞構文を観察することによって裏づけられる。そこに描写された状況と照らし合わせてみれば、まさしく知覚の性質によって、「の」補文がモノとコトの両義性を内在化させていることが明らかとなる。そしてその自然な延長線上に、第4章で扱う主要部内在型関係節の「の」の用法が位置づけられる。

第2章では、「認識動詞構文」が取り上げられる。次の構文型が代表的なパラダイムである。

- (2) a. 私は山田さんがいつまでも若々しいと感じた。(Aタイプ)
 b. 私は山田さんをいつまでも若々しいと感じた。(Bタイプ)
 c. 私は山田さんをいつまでも若々しく感じた。(Cタイプ)
 d. 私は山田さんがいつまでも若々しく感じた。(Dタイプ)

これらの構文間にみられる形式(A~Dタイプ)と意味との間には、動機づけられた有契的な関係があることが主張される。Aタイプが中核的な構文型であり、あとのタイプはその基本型と関連づけられる拡張例として捉えられる。とりわけ主格か対格かにみる格付与の差、および定形か非定形かにみる補文動詞の差、こうした違いに対し認知的な意味合いが求められる。これらの構文型は、統語論的観点からは非連続的・離散的なものとして捉えられるのに対し、ここでは連続体をなすものとして捉えられる。認識活動が知覚を前提とする場合、それは特定場面との知覚的接触をじかに反映し、それと相関的に、構文自体も知覚対象を映す補文節と知覚・認識作用を表す主節とが融合一体化した補文形式をとる。ここには類像性の原理が働いていると説明される。

第3章では、著者が「ト書き連鎖」と呼ぶ構文が多角的に考察される。ト書きや新聞キャプションなどに典型的に見られる部類のもので、たとえば次に下線部で示す部分はその例である。

- (3) a. レンコ、バス停に止まっていたバスに飛び乗る。閉まるドア。
 b. 土手に腰を下ろし、恋を語るアベック。それをうらやましそうに眺めている源公。

「閉まるドア」(NP)は「ドアが閉まる」(S)と対比される。しかし、すぐに明らかのように、形式は一見したところ連体修飾構造を含むNPであり、NPであればモノ(個体)を指し示すはずなのに、それにもかかわらず、コト(事態)の意味が読み取れる構文である。この構文は伝統的に「喚体の句」と呼ばれる構文連鎖(たとえば「あ、きれいな海!」)と似たところがあるが、この種の構文をめぐる先行研究はほとんどなく、とりわけ「のだ」文など状況にかかわる構文との相互関係については、これまで十分な構文分析がおこなわれていない。本論文では〈状況構文〉一般のネットワークを指定することによって、喚体の句との対比のもとにト書き連鎖の意味的・構文的性質が位置づけられる。

第4章では、形式と意味のずれが生ずる別種の構文として、いわゆる主要部内在型関係節が取り上げられる。これは日本語に特有な構文で、その典型的な一例を示せば、「太郎は「リングが皿の上にある」のを取って食べた」がそれである。ここで主節動詞(「取って食べる」)は形式上、コトを指示する「の」補文を取っているのに、意味上はその補文内の名詞句(「リング」)によって選択制限が満たされるような構文である。いってみれば、コト形式のなかにモノを読み取る構文である。「太郎は「皿の上にある」リングを取って食べた」という正真正銘の関係節構文とは対照的に、この主要部内在型構文にはコト志向とモノ志向の両面性が見て取れるのである。

この種の関係節については従来、名詞句説と副詞句説とがあったが、著者はこうした二つの説が生ずる根本的な理由がこの種の構文の特異性に由来するものとする。ひとつは文連結の側面を基本とする方向、すなわち時

間・結果のベクトル), そしてもうひとつは二つの節を統合し〈融合体〉を形成する方向, すなわち類像性によって説明される〈統合のベクトル〉, この二つのベクトル間の緊張関係のもとに成立している構文として特徴づける。このうち時間・結果のベクトルこそが副詞句的な解釈を可能とし, 名詞句説に加えて副詞句節が主張されてきた背景がここにあるとみる。また, 統語論的観点からしばしば主張されてきた〈定性制限〉の問題に対しても, 談話語用論的証拠に基づき, この論文に特有な時間・結果のベクトルによって説明可能であることが示される。さらにまた, 従来の副詞句説とは異なる観点から, 主要部内在型関係節がメトニミー代名詞「それ」(およびゼロ形式)を介在させた異形態と連続体をなすことが論証される。

審査の結果の要旨

本論文は, 日本語に特有な補文節構造の代表的な構文型を一般言語理論の視野のもとに取り上げ, 人間の知覚(とくに視覚)に深く根ざす〈図と地の反転〉〈類像性〉などの観点から, 構文型に見られる意味と形式のずれを統一的に説明しようとした認知言語学的研究である。

著者の問題意識は明確で, かつ問題設定も斬新である。また方法論的には, 現代言語学の趨勢を視野に入れ, 英語との比較考量の手法をも取り込み, 広範かつ多角的な議論を展開している。これまで概して形式あるいは意味のいずれかに偏った研究が目立つなかで, 著者は言語現象の形式と意味およびその相関関係を総体として捉えようとする立場に立ち, その努力は既存の研究を超える成果として結実している。

分析の対象については, 補文節の構文型のなかでも日本語に特有なものを精選し, そこに一般言語学的意味合いを求めたことは卓見である。とりわけ著者が「ト書き連鎖」と呼ぶ構文は著者の創見によるもので, これには当然, 既存の研究は皆無であり, 著者の着眼点のよさを物語っている。この構文をめぐる用意周到な議論は本論文の圧巻であり, これだけで十分に独立しうる独創的な研究として高く評価される。

一方, 「主要部内在型関係節」についてはこれまで多くの研究があり, 統語論的にも意味語用論的にも, おおむね論じ尽くされた感があるが, そうした背景のもとに著者はこれまでの知見を洗い直し, 包括的な認知言語学的視野のもとに新しい全体像を描き直している。とりわけ統語論的性質と見えるものについても認知意味論の意味合いが突き詰められ, それが全体のネットワークなかに適正に位置づけられている。既存の研究に新しい照明を当てることによって得られた成果は新しいものであり, 著者の所期の目的はここでも十分に達成されている。

本論文は, 以上のように, 現代言語学の最先端の研究成果を取り込みながら, 日本語に特有な構文の分析を通して一般言語学的意味合いを究明し, 構文レベルの研究に新しい方向を示唆するもので, 学界に寄与する第一級の業績として高く評価される。ただ, 惜しむらくは, 細部に論理的・概念的詰めの甘さが多少見受けられ, それが中身の不透明さや理解の妨げの原因ともなっている。また, 論述の冗長さや煩雑さもいくぶん気になるが, さらなる推敲を通して論文のスタイルにも磨きがかかることを期待したい。

よって, 著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。